

今日の日本社会と「ひきこもり」現象

諏訪真美

‘Hikikomori’ (Social Withdrawal) Phenomenon

Mami SUWA

要旨：日本における「ひきこもり」は、青年期の精神保健的な問題であるが、その背景には、単に個人の精神病理的問題だけではなく、家族の問題、社会・経済・文化といった問題が関わっているものと思われる。この現象の背景に影響を与えている可能性のあるものとして、日本の経済的な発展、社会的な構造、家族関係、青年全般の心理構造について、その変遷を概観した。そしてひきこもりの病理に関して、本人の精神病理的傾向、家族関係の傾向とともに、日本の社会構造の問題との関係について考察を加えた。

Keywords：社会的ひきこもり、一次性ひきこもり、家族関係、青年期、社会変動
social withdrawal, primary social withdrawal, family relationship,
young adult, social dynamics

1. 日本の青年の「ひきこもり」

日本の青年の社会心理的問題として「ひきこもり」現象が、注目を集めている。高校や大学を卒業した青年が、その後仕事につくことなく、自宅に閉じこもり、親の収入に依存した生活を送り、社会的な活動を全くしようとしないのである。彼らの中には、親と話もせず、自分の部屋で終日を送り、親が差し入れた食事を自室で一人食べる、といった生活を送っている者もいる。また、親との日常会話は普通にする者、近所に買い物に行ったり図書館に通ったりしている者など、「ひきこもり」の程度は様々である。しかし、彼らの全てが、年齢にふさわしい社会的な活動をしないのである。働かないということだけでなく、ちょっとしたアルバイトやボランティア活動、さらには友達との交流やレジャーを楽しむこともないのである。彼らは決して怠け者ではない。彼らは何とか仕事をしたい、自分は仕事をするべきだと考えている。彼らは終日自宅にこもりながら、働けない自分についてずっと考え、葛藤している。しかし何らかの行動を起こすことができず、そのまま年余に渡り自宅ですごしているのである。

この現象は1990年前後から、日本の青年の間で急激に増えている。マスコミでも広く取りあげられ、その数は100万人にも達すると言われている。日本の総人口が1億2700万人、そのうち青年期(20歳から34歳)の人口は2700万人であることから(100万人/2700万人=3.7%)、ひきこもり現象の社会問題としての大きさが推測できるだろう。

しかしひきこもり青年の実態、および、その心理的な問題の中核を把握することは難しい。それは、彼らが自ら治療を求めて受診することが稀だからである。精神科や相談機関に訪れるのは、彼らの両親であることが多い。我々精神科医は両親の話から、青年本人の問題や家族関係の問題などを把握しなければならない。本稿では、臨床経験に基づいて、この日本の青年の「ひきこもり」現象の背景について考察し、日本の社会、家族関係、青年期心性の関係について考えてみたい。

2. 社会の変化と青年期の心理的問題

青年期の心理は、その時代の社会心理的問題を、もっとも敏感に描き出す鏡ともいわれている。1945年第2次世界大戦に敗れた日本は、アメリカ型資本主義の後を追いつき、急速に経済発展した。そのなかで、家族のあり方や青年が現す心理的問題も変化している。

1950年以後、とくに1960年から1980年にかけて、日本の経済は非常にめざましい発展をとげ、国民所得は倍増をくり返していった(図1)。この経済成長によって、1950年代には食べることもままならなかった多くの国民が、物質的な生活を豊かにさせた。またその経過なかで、労働の形態も大きく変化した。戦前は労働者の多くが農業に従事していたが、戦後工場働く労働者が増加し、さらに現在は事務やサービス業など第3次産業の従事者が多くを占める労働構造になった(図2)。これによって、自宅やその周辺で働くことが減り、「労働」は「家庭」から

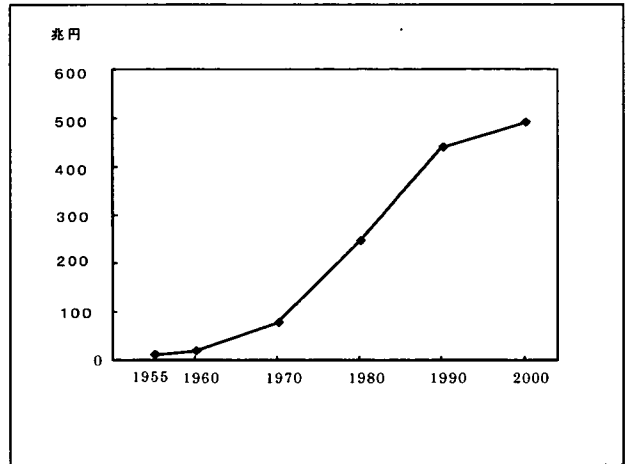


図1 国民総生産の年次推移

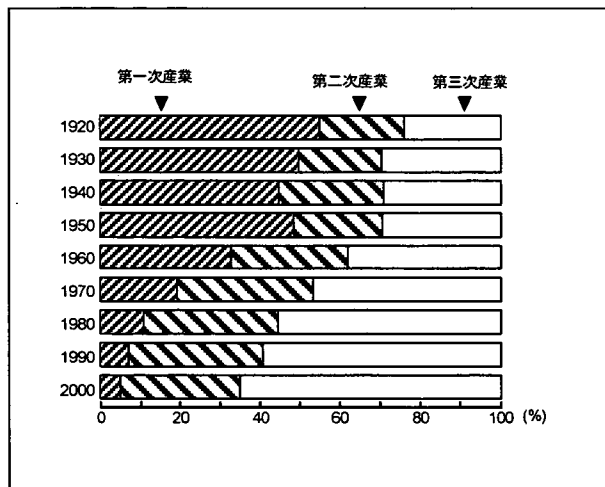


図2 産業別労働人口の変化

切り離された。父親は会社に出かけて働き、母親が家庭で働くという家族役割の変化が起こった。また好景気が続くなか父親の労働時間は長くなり、深夜まで続く残業を強いられることとなった。そのため家族とともに過ごす時間が減り、意識の上でも家族に配慮することが減っていった。さらに、会社の規模が大きくなると、しばしば父親は自宅から通勤できない勤務地に転勤する。この時父親だけが転勤先に住所を移すという「単身赴任」が選択されることが多くなった(図3-1,2)。この現象は、夫婦を人ままとまりの単位と考えている欧米の視点からは考えられない、かなり日本独

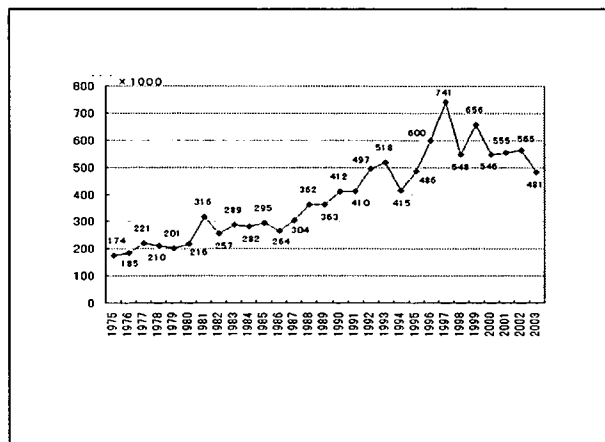


図3-1 単身赴任の家族数の変化

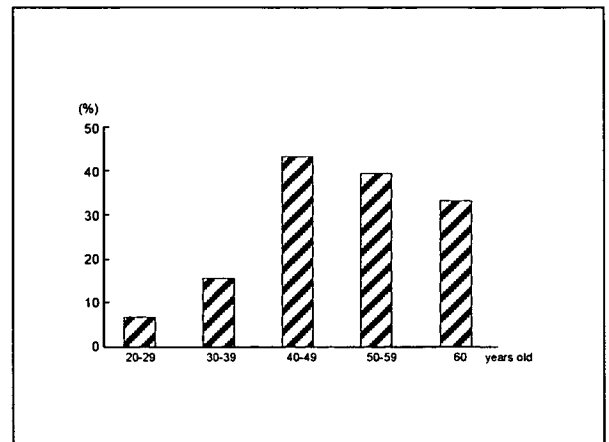


図3-2 転勤に伴って単身赴任を選択した割合

自のものであろう。図を見ると実数として単身赴任家庭の全家庭に占める割合はさほど多くはない。しかし、転勤が決まった多くの家庭において、特に親が30歳代40歳代で、子が思春期年齢にあると考えられる家庭の半数近くが単身赴任を選択するという傾向は注目すべきであろう。それは、家族は母親と子供という構成が中心と考えられ、父親の家族の中での存在の重要性が低下していることを表しているものとも思われるのである。

こうした社会変化の中、思春期・青年期の心理的・行動的な問題も変化している。1960～1970年代、大学生を中心として、古い価値観や規範の変革を目指す「学生運動」が盛んであった。彼らは、これまでの社会体制を崩すために組織を作り政府や大企業と闘った。しかし1980年代になると、日本の経済・社会は安定し、青年のエネルギーは「校内暴力」というかたちで現れた。彼らは学校の規則や教育体制に反発し、校舎や器物を壊し、教師に暴力を振るった(図4)。1980年代後半になると、このエネルギーはさらに内向して、「いじめ」「家庭内暴力」という形で現れるようになる。「いじめ」は、一人の生徒に対して同級生が、仲間はずれにしたり、悪口を言ったり、陰湿ないたづらをしたり、無視をしたりといった行為である。また、暴力は外に向かっては行なわれなくなり、家庭内で、母親や弱い妹たちに向けられるようになった。これが「家庭内暴力」である。さらに、これらの行動化と平行して、「不登校」や「ひきこもり」といった問題が増え、青年の無気力・意欲の低下が注目されている。不登校は、児童思春期における、不安や意欲の落ち込みのために、「学校に行きたいと思いつながら、どうしても学校に行くことができない」という心理的な行動抑制状態である(図5)。そして、この不登校と類似の状態として、青年期のひきこもりが増加しているのである。

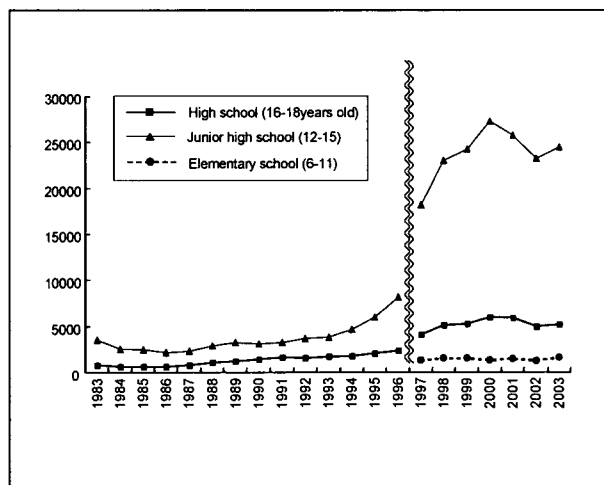


図4 校内暴力の件数

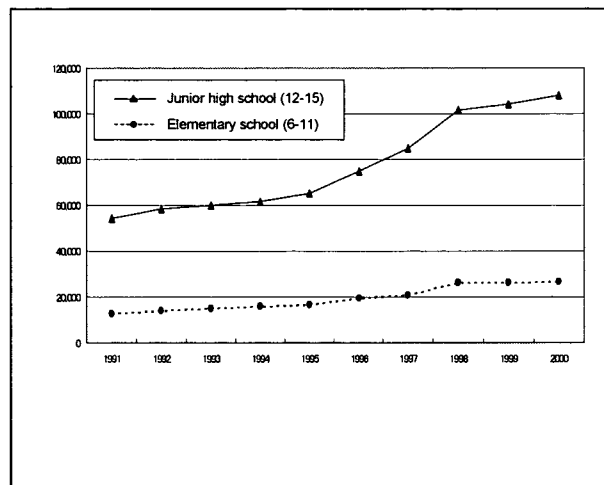


図5 不登校数

3. ひきこもりの精神病理

「ひきこもり」という言葉は、もともと精神医学の用語ではなく、一般用語として、「後退する」「内にこもる」などを意味するものである。それが近年の日本において、青年期の心理現象を表す概念として使用されるようになってきている。精神医学的には、①自宅を中心とした生活をし、②就労・就学といった社会参加活動ができない、③その状態が六ヶ月以上続いている。ただし④統合失調症などの精神病圏の疾患や精神遅滞を持つ者を除く、さらに、⑤家族以外の友人などと親密な人間関係が維持されている者は除く、と定義されている(伊藤順一郎、2003)。

つまりひきこもり現象は、うつ病や強迫神経症、人格障害などのケースに、その症状の一つとし

て二次的に現れる (secondary Hikikomori) ののである。しかし、我々が注目しているのは、何らかの精神症状のために二次的にひきこもっているわけではなく、ひきこもり以外の精神症状のない「一次性ひきこもり/primary Hikikomori」(諏訪真美、鈴木國文、2002) である。この「一次性ひきこもり」が、現代の日本社会の変化とともに増加していると考えられる。

1) 一次性ひきこもりのケース

ここで、一次性ひきこもりの典型的なケースを紹介したい。

A君は元々おとなしい性格だったが、小学校では友達もでき、サッカーチームに加わったりして徐々に活発になった。中学時代は勉強にも運動にも積極的に取り組み、現在まで交流の続くような親しい友達もできた。しかし高校受験で第1志望校に入れず、同級生に対して劣等感を感じるようになった。その後奮起して勉強することもなく、成績はだんだん振るわなくなった。このころから、友達づきあいでとても気を遣うようになり、本心を隠して適当に付き合っている自分に後ろめたさを感じていた。大学では授業や試験で困ることもなく、友達との旅行やバイトもして、なんとか適応していた。そして希望の会社に就職が決まり新人研修に参加した。その時、ほかの新入社員に対して劣等感を強く感じた、その会社で働くことが非常に不安になった。そして結局入社式当日から出勤できず、自宅に引きこもってしまったのである。その後しばらくは何もする気になれず、自宅で昼夜逆転の生活を続けた。現在は近所の図書館や本屋などには出かけるようになっている。しかし自分が働いていないことを、友人や知人に知られることを極端に恐れて、過去の交流は一切避けている。就職については、バイトではなく「一発逆転」できるようなところを希望しているが、自信はなく、結局どの選択もできずにひきこもりの生活を続けている。

彼の両親は、A君のことをとても心配している。しかし、就職についてA君を問い詰めたり、将来のことを話し合ったりしようとはしない。彼らは、日常生活に必要な最低限の会話を交わすだけで、お互い葛藤を抱えながら生活しているのである。

2) 「一次性ひきこもり」の精神病理的特徴

①「戦わずして負ける」というエピソード

A君は高校入試に失敗し、以後は勉強でもやる気をなくし、友人にも劣等感を感じて距離を置いた付き合いをしている。失敗に奮起して戦おうとせずに、戦う前に一步退いて「本来進むべき理想の道」から外れた形で、何とか適応を保っている。

②「あるべき自分」という理想像の温存

戦わないまま退却したため、A君は失敗や挫折をしていない。「あるべき自分」は、A君の中でそのままの形で温存されている。挫折によって修正されるはずの現実にあった理想像や目標を選びなおすことができない。

③その理想像への両親の備給

「一次性ひきこもりの親の多くが、就労していない成人した息子に対して、児童・思春期以来の変わらない高い評価と期待を抱き続けている。「本当は優秀でよい子」「こんなことで終わる子ではない」といった親の強い期待によって、本人が温存している理想像は、備給され裏打ちされている。

④自らの欲望による理想像の弱さ

A君は、進路選択や就職の決定について、自分の希望がはっきりせず、親の言ったままや、親が喜びそうだという理由で選んでいる。A君には「こうなりたい」という理想像や希望がはっきりしない。自らの理想像が弱いことは、社会の厳しい評価に耐えて、社会人としての生活を維持し

ていく力の弱さにつながるものと考えられる。

⑤他者による評価を守るための回避を中心とした行動原理

A君は、働いていない自分を知られること、つまり温存している理想像が脅かされることを非常に恐れている。このため、人から現状を尋ねられることや、現状から再出発を考えて等身大の自分を自覚することを避けて、その行動は、「他者による評価」を守ることに集約される。

4. 一次性ひきこもりの家族関係の特徴

我々は、「ひきこもり家族の集い」に参加している27ケースについて家族関係の特徴を調べた。27家族を本人の診断によって、(1)人格障害群（6名）(2)発達障害群（6名）(3)神経症圏群（5名）(4)一次性ひきこもり（10名）、の4群に分け、その親にアンケート調査を行なった。Olsonの家族評価尺度Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale を基に作成されたFACES-KGIV（立木茂雄, 1999）の得点について、コントロール群（20名）と合わせて5群について比較した。この結果および、家族や本人の個別面接から、以下の家族特徴をまとめた。（Suwa,Suzuki,Hara,et al.,2003）

- ① 家族間のルールがしっかり決まっている：父親または母親が決定しているルールに対して、他の家族メンバーはあまり不満と感ぜないで従っている。本人は家族文化の中で、このルールに意識しないで縛られている。
- ② 家族が価値観を共有し、不自然なプライドが伝達される：親の価値観が家族の間では違和感がなく、そのまま本人のものとなっている。こうして、本人の価値観は親のものを引き受けて、多様性・柔軟性に欠けたものとなっている。また、この価値観は親の高いプライドとともに、本人に伝えられる。
- ③ 家族間の情緒的交流が乏しく、お互いnegativeな感情の共感がしづらい：親は本人の気持ち、特に怒りや悲しみ落胆といったnegativeな感情を推測することが苦手である。家族はお互い、相手の本音や弱い部分を見ないことで、相手を傷つけないようにしていると考えられる。
- ④ お互い気遣いながらも、言葉での交流が少ない：本人が悩んでいる様子でも、そのことについて尋ねられない。気を回しすぎて、言葉をかけられない。また、本人も、悩みを誰にも話せない。親も本人も、直接正面から話し合ったり、気持ちを確認したりなどの積極的な行動をとることが苦手である。

5. ひきこもり現象の社会的背景

ここでひきこもり現象の社会的背景として考えられるものをまとめておく。

① 日本の親子関係における依存の構造

ひきこもり青年の家族関係の特徴について述べたが、これは、日本古来の家族関係の特徴に由来している。日本では、「家」を継ぐという意識が強く、土地や財産とともに代々の価値観が受け継がれていく。またそのため夫婦関係よりも親子関係の絆のほうが重視されてきた。子は成人しても親の家にとどまり、長男（一番上の男子）が嫁を迎えて、親・子・孫…と一つの「家」を守り、生活を共にしてきた。現在も、成人した子が親と同居する割合は高く、日本全体の平均では、20歳から39歳の未婚の子の2/3（68%）が親と同居している。子らは就労して収入を得るようになってからも、住居費や食費などの生活費を親に依存し、そのことに葛藤はない。また親の多くは、子が30歳代になっても、子を親の家に住ませることや経済的に援助することを当然のこと、むしろ好ましい事と考えている。

② 1960年代からの日本の急激な経済成長

ひきこもり青年の親の世代は、戦後の日本のめざましい経済成長を支えてきた世代である。この

親たちは、子ども時代には貧困を経験し、青年期・成人期に経済成長を経験し、その生活は急速に豊かになった。そして現在50歳代60歳代をむかえ、退職して国からの年金や貯蓄に頼る生活になっても、なんとか成人した子を養うくらいの収入がある。この親は決して大金持ちではなく、経済的にごく中流層である。それでも自分たちの貧しかった子ども時代とは違って、なんとか老夫婦と30歳代の子が食べていけるだけの収入を得ることができる。戦前までの日本は、年老いた両親を成人した子が扶養することが当然だった。しかし急激な経済発展の結果、この常識は逆転した。つまり、貧困を経験している親世代が、自分の生活を切り詰めて、貧困を知らない子世代を扶養しているのである。日本の急激な経済成長と年金制度、中流層の親世代の経済的なある程度の力、これらが親にも子にもひきこもりを許容する心理的背景を作っているものと考えられる。

③ 父親不在、社会の規範を教えるものとしての父親的役割の低下

現在日本では、古来の家父長制による強くて怖い父親像は失われたと言われている。親自身が物分りの良い、友達のような親になろうとする傾向があり、親と子の境界があいまいになってきている。また先ほど述べたように、経済成長の中、父親は外で働くことが忙しく、家庭に注ぐエネルギーや意識は薄れてきている。実際「単身赴任」によって、何年も父親が不在となる家庭も多い。こうして日本全体で家庭の中の父親像は大きく変化した。社会的な規範を教える怖い父親役割を果たすものがなくなったのである。心理的な意味での「父親」の存在は、子が社会化し自立の課題を果すために欠かせないものと考えられる。ひきこもり青年が、自立し社会に出ることができないのは、社会における「父の機能」が弱くなっていることも関係していると思われる。

④ 1980年代からの、若者全体の無気力・しらけ

親が懸命に経済を発展させた中、子には生まれたときから豊かな生活が与えられていた。子らは、飢えることも知らず、家事や家業の支え手になることもなく、高学歴をめざして、学校教育における成績を重視して育てられた。この高学歴、高収入が幸福につながるという考えは、1970年代までは、日本の国民すべてが共有していた。大人も子供も、生活の豊かさを目指し、一つの方向性を持って仕事に勉強に頑張った。しかし1980年代になり一定の成長を遂げた社会にとって、新たな科学の進展やさらなる経済発展は簡単ではなくなった。また科学や経済の発展が幸福につながるという思想にも疑問が持たれる様になった。つまり豊かさと安定の中、国民の価値観は多様化し、一つの方向性を目指すことができなくなった。若者たちは「頑張って勉強し、良い仕事につき、豊かな生活をする」といった従来の目標を持つことができなくなった。次の目標を見つけれない青年たちは、方向性を失い、新しいものへ挑戦する熱意を持たず、積極的に何かを求められない。彼らの生きる力、何かを創造する力、また耐える力は弱まり、仕事にも遊びにも意欲を持つことが難しい状況になっている。

6. おわりに

1960年以後の日本の社会変化と、青年期の問題行動の変化について紹介した。そのなかでも特に、現在の日本の文化、社会情勢、家族関係を背景として増加している「ひきこもり現象」について解説した。心理的な現象、特に青年期のものは、その時代や文化の影響を強く受けるものと考えられる。19世紀のロシア文学において、ゴンチャロフは、「オブローモフ」の心理について詳細に描き出している。それは当時の時代の影響のもとに、つまり農奴制と貴族文化のもとに生まれた貴族青年の、怠惰と無気力の心理といえるのであろうか。彼は両親の莫大な財産のもと、召使に身の回りのことをすべて任せ、自分で着替えすらすることなく育てられた。その経済的背景や生い立ちは、ひきこもりの青年とは大きな違いがある。ひきこもりの青年は、本来は人との交流を求める性格傾向であるのに、自らの現状を恥じているがために、友達との付き合いを避けて孤独に耐えている。

彼らの周辺には気心の通じた召使も財産を目当てに訪れる知人もいない。しかしひきこもり青年とオブローモフの、無気力の心理や社会参加をしないという行動特性には、ある共通点が見出せるのではないだろうか。ロシアと日本という、異なる文化、異なる時代と社会状況のもとで、青年の心理的構造や問題について比較検討できれば、このひきこもりという心理的問題についての考察がさらに深めていけるものと考えている。

— 本論文は、2005年6月ペテルスブルグにおける「日露精神分析交流会」での発表に、加筆・修正したものである。 —

文献

伊藤順一郎(代表).10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン.

こころの健康科学研究事業.2003.

諏訪真美, 鈴木國文:「一次性ひきこもり」の精神病理学的特徴, 精神経誌104 (12) :1228-1241, 2002.

Suwa,M. Suzuki,K, Hara,K. et al. Family features in primary social withdrawal among young adults, *Psychiatry Clin Neurosci*, 57,586-594, 2003.

立木茂雄.家族システムの理論的・実証的研究—オルソンの円環モデル妥当性の検討—.川島書店,東京,1999.